



谷崎潤一郎全集 第二十七卷

定價二八〇〇圓

昭和四十三年十一月二十五日初版發行
昭和四十九年十二月十日普及版發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 高梨茂

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一八一七
電話（五六一）五九二一
振替東京二一三四

若
菜
上

若菜上

イ、弘徽殿太后の崩御のこと始めて見える

ロ、先帝の皇女として

生れ、先帝の時に、源氏姓を与えられた人という意。この先帝は桐壺院の前の代に当る

ハ、桐壺院の藤壺の異母妹に当る

朱雀院すざくいんの帝みかどは、この間の行幸みゆきの後、その時分からずとおん心地がすぐれず、お慰なぐさいになつていらっしやいます。もともと御病身でいらっしやいます上に、今度はことにもの心細くお感じ遊ばすにつけても、かねてから出家の本意がありながら、母后ははきさの宮の御存生中は何かと御遠慮遊ばして、今日まで見合せていらっしやったのですが、やはりその方へお心が惹ひかれるのでしょうか、「この先長くも生きられない心地がする」などと仰せられて、その御用意などを遊あそばします。御子みこたちは、春宮とうぐうを除きまいらせて、女宮たちが四ところおいでになりました。その中で、かつて先帝の時の源氏げんしで、まだこの院が春宮の頃にお上りあがなされたおん方で、藤壺ふゆと呼ばれていらっしやいましたのが、ゆくゆくは後の位にも定まり給うべきでしたのに、格別のおん後見うしろみもおありにならず、母君の身分も、これという家柄でもなく、ほんのちょっとした更衣に過ぎませなんだとこ

ろから、内裏うちでのお附合つきあいも肩身かたみが狭く、まして大后おおきさきが、尚侍なしののみを入内いりうちおさせなされて傍かたわらに人なきがごとく後押しごおしをされたりしましたのに、気壓けおされていらっしやいましたのを、帝もお心のうちではいとおしゅう思おもひ召めしながら、やがて御位みくらをお降おりになりましたので、とうとう芽をお出しにならず、氣の毒な有様で、わが身の不運うんを恨むような風でお亡くなりになりました、そのおん腹おんあはらのみの女三宮おんなさんのみやを、大勢おいで遊ばすうちでも、わけて可愛くお思おもいになって、大切にかしずいていらっしやいます。お歳としはその時分十三四ぐらいでおいになります。院はいよいよ世を捨てて山籠やまごもりをするにつけても、後に取り残されて誰を力にお過しになるといふのであろうと、ただこのおんことを御心配なされ、思おもい歎なげいておいでになります。西山にしやまの御寺のみでらの造営が終りまして、そちらへお移りになる御準備をなさいますかたわら、またこの宮のおん裳着もぎのことをお思おもい立ちになって、そのお支度をなさいます。院のうちに御秘藏ひざうなすっていらっしやるおん宝物たからもの、おん調度てうどどもはさらにもいわず、何でもないお手遊びのお道具までも、少し由緒ゆいしよのある限りの品々は、皆この宮のおん方へとお上げになりました、他の御子たちにはその次々の品を御分配になるのでした。

春宮は、院がそういう御病氣おんぜいの上に、遁世とんせいの思召おもほしめがおありになるとお聞きになります、お伺いになります。母女御もにようごもお附き添そい申して、参上さんじやうなさいます。すぐれた御寵

承香殿女御。髭黒
大将の妹

へ、老いぬればさらぬ
別れのありといへば
いよいよ見まほし
き君哉〔伊勢物語〕

愛を受けたのではありませんけれども、かように春宮がお生れなされた、限りなくめでたいおん宿世のおん方でいらっしゃいますので、院も年頃のおん物語をこまごまとお取り交しになるのです。宮にもいろいろのおん教え、世をお治めになるお心づかいなどをおっしゃってお上げになります。お歳のほどよりはえらく大人びていらっしゃいまして、おん後見の女御方のお里もそれぞれ身分のある方々でいらっしゃいますので、たいそうお氣強うお感じになっておられます。「もはやこの世に執着ありません。女宮たちが大勢後に残りますので、その行くすえを案じますのが、『さらぬ別れ』にも絆になりそうに思われます。年頃人の身の上で見聞きしたところを考えましても、女はとかく自分の心のままにならないことをしてかして、人の誹りを受けるように生れついていますのが、まことに口惜しく悲しいことです。やがて思し召すままの御代になったら、何かにつけて、あの人たちにいずれもお眼をかけて上げて下さい。その中で後見などのある人は、その方へ任せておいても構いません。しかし三宮は年端も行きませんし、私ひとりを頼みにしていましたのに、その私が出家をしましたら、後でどのような途方にくれることやらと、それがたまらなく心がかりで、悲しく思います」と、おん眼を押し拭いつつお話しなさいます。女御にも、温かい心を持って尽くしてお上げになるようにお頼みになります。が、その女宮のおん母君の、藤壺と言われたおん方が、誰よ

りもおん覚えがめでたくて時めいていらっしゃった頃には、皆それと競争をなすって、睨^{にら}み合っていらしたおん間柄のことですから、そのお氣持がまだ残っていて、今は格別憎いというほどのことはなくとも、ほんとうに心を籠^こめてお世話しようとはまでは、どなたも思っていないんじゃないでしょうか。

朝夕にこのおんことを思い歎いていらっしゃいます。年が暮れて行くにつれて御病氣はまことに重くおなりなされて、御簾^{みす}の外にもお出になりません。ときどきおん物怪^{もののけ}に悩まされ給うことはありましたけれども、こういう風に引きつづいて、ちょっと止^やむ時がなくお苦しみになることはおありにならなかったのに、やはり今度は最後であるとお思になるのです。今は御位をお降りになっていらっしゃいますが、御在位の頃から御恩にあずか^つておられた人々は、昔に交^まらず御機嫌うるわしゅう、お情深ういらっしゃるおん有様を、心の慰め所として、いつもお伺いしては御用を勤めておられましたので、その方々は皆胸を痛めて、御無事を祈^{いの}っておいでになります。六条院からお見舞いがたびたびあります。御自身でもお伺いなさるとおっしゃいますので、その由を聞^きし召して大そうお喜びになります。中納言^{ちゅうなごん}の君が参上なさいましたのを御簾の内にお召しになりました、こまやかなおん物語があります。「故院^{こゐん}がお崩^かれなさいます時にさまざまな御遺言^{ごいごん}があった中で、この院のおんことと今のお上^{かみ}のおんことを、取り分けてお

イ、夕霧

ロ、桐壺院

ハ、六条院、すなわち

光源氏

言いのこしになりましたけれども、位にいる時は公おみやげの掟おきてがあるので、心のうちの親しみは変らないながら、つまらない行き違いから、お恨みを受けるようなこともあったと思います。長い年月の間に、その時分のことを後まで恨んでおられるような様子を、どういう折にもお漏らしになったことはありません。賢い人でも自分の身の上のことになると、道理を間違えて取り乱したりして、必ず意趣を含み、曲った行いをするようになることが、昔でさえも多かったのです。ですから、いつかはそんなお心がちらりと覗けることもあろうと、世間の人もそう思っていていましたのに、とうとう我慢し通してしまわれて、春宮などにも好意を寄せて下さいます。その上姫を入内させて、今は一層深い間柄になり、親しくなすって下さいますのを、心の内では限りもなく嬉しく思いながら、何分本性の愚かなのに加えて、子ゆえの闇やみに迷ったりして、見苦しい振舞いをするのもいかかと、わざと餘所事よそごとのように、人任せにしています。もっともお上のおんことは、御遺言を達たえず世をお譲り申し上げたところ、かように末の世の明君として天あめが下を治め給い、前の代さきの不面目を取り返して下さいましたのは、全く私の願い通りになったわけで、この上の喜びはありません。それにつけても、この間の秋の行幸から、昔のことも合わせ偲おもばれてなつかしく、お目にかかるのが待遠まちしく思われるのです。じきじきに対面して申し上げたいことなどもあります。是非御自身で訪ねて来て下さるよ

うにお勧め申して下さい」などと、涙ぐみつつおっしゃいます。中納言の君、「遠い昔のいきさつは、何とも私には分りかねることでございます。成人いたしました、公にも仕えるようになりましてから、世の中のことにかれこれと係り合いますにつけて、大小となく父に相談いたしますけれども、そういう場合にも、また内輪の話の折などにも、若い時分に辛いことがあったなどと、ついぞ仄めかされたことはございません。『こうして朝廷のおん後見を途中で御辞退申し上げ、遁世の望みを叶えるためにすっかり引き籠ってしまつてからは、何事をも与り知らぬようにしているので、故院の御遺言のようにもお仕えせずにいるのです。今の院が御在位のうちは、自分も年が若かったし、人間も出来ていなかったし、偉い人たちが上に大勢控えてもおられたので、自分の志を遂げて御覧に入れる機会もなかったのです。今はこうして御位をお降りになって、のどかにお暮し遊ばしていらっしゃるのです、お伺いして心のうちを隔てなく申し上げもし、承らしてもいただきたいと思うのですが、やはり何となく窮屈な身分になったので、ついそのままに月日を過しているようなわけで』と、折々歎いておいでになります」などとお奏しになります。

まだ二十にも少し足りないほどですけれども、たいそう貫禄も整って、顔だちにも今が盛りの色つやが溢れて、ひどく美しいのを、おん眼にとめて打ち守らせ給いながら、

処置に悩んでいらっしやるこの姫君を、こういう者になどと、人知れずお思い寄りになるのですた。「何か近頃は、太政大臣おきおとどのあたりに縁があつて、身を固めたという話だね。年頃故障がはいっているように聞いていたので、気の毒なことと思つていたのが、それで安心したというものの、多少残念に思う仔細しさいもある」と仰せられますので、何と思し召しておっしゃることやらと、訝いぶかしく感じながら、なるほど、そういえば、あの姫宮ひめみやのお扱いにお困りなされて、しかるべき相手があつたら、それに嫁ととがせて心安く出家をしたいものと、お考えになつていらっしやるのを自然漏れ聞いてもいましたので、ひょっとしたらそんなおつもりではないのかと、考えつきはしますものの、でもそんなことを、何として心得顔に御返事申し上げましょう。ただ、「何の働きもございません身には、なかなか恰好かつこうな縁も見つかりかねまして」とばかり申し上げて、差し控えてしまいます。女房などは御簾の蔭から身を乗り出してお姿を見て、「御器量と言ひ、おん心用もちもいと言ひ、あれだけの方がめつたにおありになりましょうか。何という御立派な」となどと、寄り集つて言うのですが、中で年を取つたのは、「いやいや、そういっても、あの六条院がこれほどの若さでおいでになった時のおん有様と、比べものになりましょうか。ほんにあのお方は眼も眩くらむようにお綺麗きれいでいらっしやつたものを」などと言ひ合いますのを、院もお聞き遊ばして、「全くあの方は異様に美しい人だったね。近頃はまたあの

時分よりも老熟して、光るとはあのようなを言うのかと思えるほど、いよいよ輝きが
増して来た。真面目に公の用事などをする時は、凜とした威厳があって、見るも眩い心
地がするし、また打ち解けて冗談を言ったりふざけたりする遊びの場合には、その方面
でも並々ならず愛嬌があって、誰よりも親しみやすく、惹きつけられる気がするのは無
類で、こんなのは世間に例がない。何事にも前の世の善根が思いやられて、珍しい様子
をした人だ。幼い時分内裏で育てられていた頃は、どんなに限りなく帝王の慈愛をお受
けになったことか。お上があんなにも撫でさするように大切に遊ばして、御自分の身に
かえてもと思し召していच्छあったが、わがままな心驕りをせず、遜って、二十にな
るまでは納言にもならないでしまった。たしか二十一の歳に、宰相で大将を兼ねられた
のではなかったであろうか。それから思うところ中納言がえらい出世をしているのは、
だんだんと一門の声望が盛んになったせいであろう。政治の方の学問とか心構えとかい
う点からは、これもおさおさ父に劣りそうでもなく、どうかすると親以上に老成した感
じがあるのは奇特なことだね」などとお褒めになります。

姫宮がたいそう美しくて、あどけなく無邪気なおん有様なのを見給うにつけても、
「この宮をせいぜい可愛がって上げて、未熟なところを大目に見て教えて差し上げるよ
うな人で、信用できる人があったら預けたいものだ」などと仰せになります。重だっ

たおん乳母^{めのと}どもをお召し出しになって、おん裳着^{もぎ}の時のことなどを仰せられるついでに、「六条の大臣が式部卿宮の姫^いを生^おし立てたように、この宮を引き取って育ててくれる人はないものであろうか。尋常^{ただびと}人の中にはありそうもないし、内裏^{うち}には中宮が伺候しておいでになる。つぎつぎの女御たちとても、やんごとない人々ばかりが揃^{そろ}っておられるのであるから、しっかりした後見^{うしろみ}がなくては、そういう中に交^{まじ}って宮仕えをするのも、並大抵ではないであらう。この権中納言の朝臣^{あそん}が独^{ひと}り身^みでいた間に、仄^{ひだ}めかしてみればよかったのだ。若いけれども非常にすぐれたところがあって、行く末たのもしそうな人らしいのに」と仰せになります。「でも中納言はもともって実直な人で、年ごろ今のおん方に思いを寄せていまして、餘所^{よそ}のあたりを見向きもしなかったのでございますから、その望みが叶った今となつては、なおさら心を動かすはずはございますまい。それよりはあの父の院こそ、なかなか今でも、いろいろな折につけて人を慕わしくお思になる心が、絶えずおありになるようでございます。わけてもやんごとなき御身分の方をお求めになるお志が深くて、前斎院のおんことなどをいまだに忘れることができません、おん文をお上げになりますそうで」と申し上げます。「いや、その相変^{あまた}らずの浮気心が、どうも心配なのだ」とは仰せになりますものの、ほんに、数多^{あまた}の人たちの中には、辛い思いをすることはあっても、やはりこのまま親代りということにして、そ

イ、朧月夜のこと。

「賢木」三六八、三

七〇頁以下、および

四〇一頁以下参照

っくりあそこへ引き取って貰ったら、などともお思いになるであります。「ほんとうに、まあ少しでも世間並みな夫婦らしい暮しをさせたいというような娘を持ったら、同じことならあの人の側に置いてやりたく思うであらうね。どうせ長くはない浮世に生きてゐる間は、ああいう風に心ゆく限りの楽しみをしてこそ過したい。私が女だったら同じ兄弟であっても、必ず寄り添って契ったであらう。若い時分などには、よくそう思つたものだ。まして女が迷わされるのはもっともなわけだ」とおっしゃるのですが、お胸の中では、昔の尚侍の君のおんことなどを思い出しておいでになるのでしょうか。

この姫君のおん後見たちの中で、或る地位の高いおん乳母の兄に左中弁がいましたが、その人は六条院にも出入りしてゐまして、年ごろ親しく仕えてゐるのです。こちらの御殿にも深く心を寄せてゐまして、よくお伺いしますので、或る日乳母はその兄が参上したのに会いまして、物語をしますついでに、「お上がこれこれの思召しがあって、それらしいことをおっしゃっていらっしゃいますが、折があったらあの院にお漏らしになつて下さい。女御子というものは、独り身でおいでなさいますのが普通ですけれども、何かにつけて面倒を見てお上げ申し、いろいろの場合にお世話をして上げる人があったら心丈夫だと思います。このおん方には、お上をお措きまいらせて、親身になつてお上げ申す^{わたくし}がないので、私どもがお仕え申してゐるといっても、何ばかりのお役にも立ち

ません。お側にいるのは私だけではないのですから、自然思ひも寄らないことを引き起したりして、およろしくない評判などが立ちましたら、どんなに厄介なことでしょう。

お上の御在生中に、何とかこのおん方のおん身が定まりましたら、御奉公しやすかろうと思います。貴いおん血筋でいらっしやっても、女はいとも宿世の定めがたいものなのですから、考えるといろいろ心配になりますし、かように大勢の御子たちがおいで遊ばす中でも、取り分けいとしがられていらっしやいますので、人の嫉みがあるかも知れませんし、何とかして些細な瑾をもおつけ申さないようにしたいのですが」と、相談を持ちかけますと、「どういう次第がおありになるのか、不思議にあの院はお気の長いお方で、かりにもお見初めになった人は、お心の留まったのも、またそれほど深くなかったのも、ほどほどにつけてお迎え取りになって、御殿のうちに数多お住ませになっていらっしやるが、大切になすっておいでなのは、やはりちゃんとしまっていて、お一方だけなのだから、そのお方の勢いの強い蔭には、あるに甲斐ない月日を送っていらっしやる方々が、大勢あるというわけです。ところで、御縁があつて、もしそういう風なことにもなるとしたら、その大切なお一方とても、こちらと肩を並べて対立なさることはできないであらう、と、一応は想像されるけれども、なおその点はどうであらうかと、案ぜられるふしもあるような気がする。そうかといって、『この年になって、身に餘る栄

耀榮華ようえいがをして、何一つ心残りなことはないのだけれども、ただ女のことについては、今までに人の非難も受けたし、自分の心にもまだ不満足なことがある』と、いつも内輪の御冗談話におっしゃっておいでになるが、全く私どもから見てもそうでいらっしゃると思われる。いろいろな関係でお世話をしていらっしゃる方々は、どなたも不似合いな、身分の低い人たちではいらっしゃらないけれども、皆たかの知れた尋常人ただびとのことなので、院のおん有様に比べられるような声望を持ったお方は、いらっしゃらないように思える。それを思うと、同じことならそういう御縁がお出来になったら、どんなに似つかわしい御夫婦におなりなさろう』と、弁はそんな風に言いますので、乳母はまた何かの折に、『これこれのことを某なにかしの朝臣に仄めかしましたところ、『必ずかの院は御承諾申されるであらう。年頃の御希望が叶って満足にお思ひになるに違いないから、たしかにこちらの允許があるものなら、お取次ぎをしよう』と申しておりますが、どういたしたものでございましょう。あの院はそれぞれに方々かたがたの身分々々をお考えなされて、珍しいほど行き届いたおん仕向けをなさるようですが、尋常人ただびとでさえ、ほかに自分と同じように可愛がられている人が立ち並んでいられては面白くなく思うのですから、まして宮は、お心に餘ることもありませんでしよう。宮のお世話をさせていただきたいとおっしゃる方々は、ほかにも数多いらしいです。よくよく御分別なさいまして、お取りきめなさいます

のがようございます。高貴な方と申しましても当節の風としましては皆てきばきと御自分で処置をして、お好きなように世の中を過される向きもありますが、あの姫宮は一向たわいがなく、頼りなく、ただただ心もとなくお見えになりますし、お附きの人々も、御奉公には限りがあります。気の利いた召使も上から大体のお指図をいただいて、それに従って仕えましてこそ働きのいいのです。旁々特別なおん後見がいらっしゃらなければ、やはり何かとお心細うございましょう」と申し上げます。

「私もそのように思って、いろいろに分別しているのだ。女御子おんなみこが縁づくということは、厭いやに軽々しいようでもあるし、またどんなに身分が高いにしても、女が男に逢うとなれば、悔くやしい思いや腹立たしい思いをするようなことも自然起って来るものなので、一方からいえば可愛そうできめかねているのだが、しかし親たちに先立たれて、頼む木蔭がなくなってしまうと、独り身の決心で世の中を渡って行くこともどうであらうか。昔は人情が穏かで、世間が許さないようなことは、誰しもしてはならないものときめていたのに、今ではすきすきしい、みだりがわしい事件も、折に触れて耳にはいる。昨日までは貴い親の家にいて崇められ、かしずかれていた人の娘が、今日は取るにも足りない分際いふの、卑いやしい好者すきものどもに欺だまされて、浮名を立て、亡くなった親の名を汚したり、あの世の人に恥を搔かせたりする類たぐいが、いくらもあるように聞いているが、そんな風に言